

全久院報

松本市深志3-7-50 電話 0263-36-3211

あけましておめでとうございます

本年も多くの皆様に除夜の鐘を撞いていただきました。昨年から続いた世界経済恐慌の波が引き、暗雲を吹き払い、皆様が幸福を実感できる新たな年になることを祈念して、私も鐘を撞かせてもらいました。

昨年、前住職の三回忌に縁の深い法類(お寺同士の親戚にあたる)の皆様、お茶のお弟子さん、親戚の皆さんにお集まりいただきました。思えば密葬、四十九日、百ヶ日、本葬、一周忌と儀式が続きましたが、檀信徒の皆様のご厚情により父を送ることができました。心から感謝申し上げます。檀信徒の皆様からたびたび「前住職のお墓はどこでしょうか、お参りさせていただきませんか」との問い合わせがあります。歴



代の住職や全久院に関係した僧侶のお墓は、本堂に向かって左に稲荷堂がありますが、その真裏がお墓になっています。木の塀で囲まれ、戸が閉められていますが自由に入ることができますので、どうぞお参りください。



三回忌が過ぎたことで、私にとっても気持ちの上で一区切りつけることができました。この間に社会は世界恐慌、政権交代、環境問題、国家間の対立、家庭や地域の崩壊など数え切れない問題を抱え込みました。また伝統的な家族意識も変化して、「ご先祖様を大切に」というだけでは若

い世代に宗教の意味を継承してゆくことは大変難しくなってきました。この激変に対して、お寺として何ができるか初心に帰って突き詰めて行かないと、お寺の存続さえ怪しくなる時代に入ってきたと思います。檀信徒の皆様の要望や意見を吸収しながら、さらに勉強し、修行し、皆様が心穏やかに集える全久院にしてゆきたいと考えています。本年もよろしく願いいたします。

大屋根の瓦吹き替え工事

檀信徒の皆様には本堂大屋根瓦葺き替え工事に対して、早速寄付にご協力いただきましてありがとうございます。

寄付に付きまして12月現在、約330軒、2500万円の申込みがあり、8割の方に送金いただき、約2300万円の入金がありました。今回の寄付に関しまして最終集計に約700軒弱の申込み軒数を予測しておりますので、現在までに47%の申込みがあり、なんとか目標に届く金額で推移しております。しかし現在の経済状況をかんがみ、目標を達成するま



で気を緩めることなく檀信徒の皆様をお願いするつもりです。

工事の進捗状況ですが、12月上旬クレーン車が入り鬼瓦を下ろしました。右の写真は工事用に足場が組まれシートで覆われた本堂です。工事が完成するまで、このままの状態が続きますのでお参りの皆様にはご迷惑をおかけしますが、なにとぞご容赦ください。また、大屋根の峰から鬼瓦が消えている姿がしばらく続きます。こんなお寺の姿も珍しいかと思えます。

下ろされた鬼瓦は本堂の軒下に置かれています。10数個のパーツに分かれており、一つを持ち上げてみると、30kgくらいあるかと思われまので、鬼瓦一つで500kgくらいの重さになるかと推測されます。大きさは高さ3m弱、巾5m弱の大きさです。地上から見るとそれ程には見えませんでした。真近かで見ると大変大きなものです。また苔が張り付いているのにも驚かされ、これ以上知らずに傷みが進んでいたら大変なことになっていたかと、改めて知らされた思いです。なおこの瓦は三州の瓦工場に送られ、型が取られ、新しい瓦となります。古い瓦は記念に保存展示する予定です。



また、22年には瓦吹き替え工事に伴い、お墓側にも足場を組みますので、場合によってはお墓が汚れないように覆いをします。お参りする際ご不便をおかけするかと思えますがなにとぞご容赦ください。工事の完成予定は今年の年度末です。寄付に関しましても、工事の完成時までにご協力をいただきたいと存じます。

・寄付金について

一口 25,000円 (皆様に平均三口をお願いいたしたいと存じます)

・寄付の払込みについて

払込み期間	平成22年12月31日まで (檀家様のご希望、ご相談ください)
払込み方法	1、全額 一括払い
	2、分割 複数の払込み回数可能 (檀家様のご希望、ご相談ください)
	3、払込み ・現金 寺院へ持参か、現金書留にて
	・払込み ゆうちょ銀行の払込み口座 払込み用紙にて
	(なるべく払込みにてお願いいたします)

以上ご理解のほどよろしくお願いいたします。

境内散歩 - 烏瑟沙摩明王 -

山門を入りすぐ回廊を右に曲がり突き当たったところにお墓の入り口がありますが、そこに安置されているのが烏瑟沙摩明王(うすさまみょうおう)です。浄、不浄、浄穢不二(じょうえふに・浄さと穢れの垣根を越えた世界)の三時に住み、物の不浄を食い尽くす仏様です。

この仏様には神通力があり、三千大千世界(仏の世界)を振動させ、天宮龍宮諸鬼神宮を砕き、ひとたび悪鬼や穢物を指差すと、これらのものは全て命を育む母なる大地に変わってしまうと言われています。諸仏が悟りをひらくときに力士となってもろもろの悪魔を退散させることを誓ったといわれ、その神通力により諸の悪鬼は発心して如来の下で修行に励むようになった、とお経に書かれています。



また不浄金剛の別名を持ち、あらゆる不浄を清浄に転じるといわれ、烏瑟沙摩法という密教の祈祷修法により蛇の毒や悪鬼のたたりなどあらゆる不浄なものを取り除くことができるといわれ、この明王は不浄除けの本尊として厠(トイレ)に奉られています。

さらに烏瑟沙摩明王経には、身体は赤色で怒りの形相をしていゝる。目は赤色で密目(みつもく)といわれる狸のような目をしており、髪は黄色で炎のように上がっています。持ち物は一定していませんが、杵(しよ)、剣や棒・金剛鈴・弓、宝輪、数珠を持っています。手の数は2, 4, 6, 8本など様々であったり、国宝や重文に指定される作品はないなど、朝廷などの公の信仰を受けたとは考えられず、個人や民間の純朴な信仰の対象になっていたと考えられます。

わたしの小さい頃、全久院の周りは天神町といわれ、芸者さんの置屋がたくさんありました。その芸者さんたちがひっきりなしにお参りに来たのを覚えています。彼女たちが日ごろ抱いていた様々な思いを浄化していたんでしょう。お寺の片隅にも表には現れない様々な信仰が、ひっそりと息づいていました。こんな小さな仏様にも救いを求めお参りに通っていた時代と、ものはあっても殺伐とした現代と、どちらが人間らしく生きられているのでしょうか。この仏様の憤怒のお顔は何を現代に訴えかけているか、しっかり考えなくてはなりません。

全久院の集い

座禅会

座禅会では「従容録」を勉強していますが、禅問答の中に中国に伝わる故事がたくさん出てきます。その故事を知らないと、全く何を言おうとしているのか見当もつきません。逆にその故事を知っていると、難しい内容のことをたとえ話として平易に説明できたり、話すことに深みを持たせることができます。故事をいくつか紹介したいと思います。

「箭鋒相拄」(せんぼう あい さそう) (箭鋒とは矢尻のこと)

昔弓の名人がいました。師匠の名は紀昌(きしょう)、弟子の名は飛衛(ひえい)といました。二人とも天下一だといわれていましたが、飛衛は天下一が二人いるのはおかしいのだと思い、師匠がいなければ自分が天下一になれると考えていました。そこで飛衛は師匠を殺そうと考えました。ある日野原へ狩りに出かけた飛衛は師匠を遠くに発見、早速弓をかまえ、矢を射ました。師匠の紀昌はそれを察知し、自らも矢を射ました。すると両者の真ん中で矢尻どおしが的中しました。という話しです。矢尻の描く線が一致したのです。

極めると根本のところでも一つになる。極めてないと、矢の描く線がばらばらで、矢尻どおしが的中するはずもありません。真理のところでは心と心が一つになっていることを表しています。

「瑕疵を指點して還って壁を奪う」(げしを してんして かえって たまをうぼう)

(瑕疵 は きず のこと。 指點 は 指摘する こと。)

むかし趙の国に藺相如(らんそうによ)という人がいて、苦学をし有名になった。ある時趙王に認められ大臣になりました。隣の秦国は趙国を手に入れようと、無理難題を押し付けてきた。「趙国の宝の玉を15の城と交換するが、持ってこなければ攻撃する」と申し出た。宝の玉は王の印だから渡すわけには行かないし、玉を持って行けば、玉を奪われた上に切り

殺されるだろう。この難題を背負い藺相如は使者として出向いた。藺相如は玉を手渡すと「その玉にはきずがある」と告げると、秦王は「どこにある？」と玉を出した。玉を受けた藺相如は「ここに」と言うや、一目散に玉をもって逃げ帰った。玉は一度秦王に渡したのです。

ここで玉は仏性であり悟りを現します。藺相如は本物を見抜く心を持ち、本物をつかむ勇気と知恵と行動力に富んでいます。秦王は本物を見抜く心を持たず、ものや財産に目がくらみ、みすみす本物の仏性を手にすることができません。玉・城・藺相如・秦王を使うといろいろな解釈が生まれてきませんか？こんな故事を日常生活の中でどのように活かしてゆけるかも、「従容録」を読みながら勉強しています。

仏教ミニ知識

皆さんはジャータカ物語をご存知ですか。イソップ物語やグリム童話は良く知られていますが、これらの物語に大きな影響を与えたインドの物語がジャータカです。ツバメに自分を覆う金の板をはがせて貧しい人々に届けさせた「幸せな王子」物語の原型はジャータカと言われています。このジャータカを取り上げてみたいと思います。

ジャータカは前生物語といわれています。深遠な教えを説いたお釈迦様はこの世一代の修行のみで悟りを開かれたはずがない。生まれ変わりを数限りなく繰り返し、功德を無限に積むことで仏陀（真理に目覚めた人）になられた、と当時の人は考えました。お釈迦さまが今の世以前に積み上げられたた功德を前生物語としてまとめたのでした。いく編かの有名な前生物語のうち今回は「投身飼虎（とうしんしこ）」を取り上げます。この物語は金光明経（こんこうみょうきょう）に説かれており、法隆寺の玉虫厨子の台座にも描かれているものです。

「投身飼虎」

ある国に慈悲深い3人の王子様が住んでいました。ある日3人で山中へ分け入ると、7匹の子虎をかかえた飢えた雌虎が死にかけているのを見つけました。兄弟たちは哀れみの心を起こしてもなすすべがなくその場を去って行くが、末の弟摩訶薩埵（まかさった）だけは仏道を成就するために自分の身を惜しまない決意をし（不惜身命 ふしゃくしんみょう）、引き返しました。飢えた虎に食べさせる物はなく、思いあぐねた末、自分の身を食べさせる決心をしたのです。着物を脱ぎ竹の枝にかけ虎の前に横たわりました。しかし、虎たちにはもうその王子にさえ襲い掛かる力は残されていませんでした。そこで薩埵は竹で自分の首を刺し、血を出したまま高いところから虎の目の前に飛び降りました。虎の親子はその血をなめて力を取り戻し、薩埵の身を食べ始めました。弟を探しに戻った兄弟が見つけたのは食べ残された残骸だけでした。二人は号泣し、王夫妻は悲嘆にくれました。しかし自分の身を惜しまぬ薩埵の仏道修行の思いは結実し、摩訶薩埵王子は仏陀となり、天に上って行ったのです。

以前、大相撲の貴乃花が横綱を襲名するときの言葉を思い出された方もいると思いますが、彼の言葉「不惜身命 ふしゃくしんみょう」はここから出ていたのです。数限りない生まれ変わりを繰り返す中で、このような自分の身を厭わぬ修行を積み上げ、人間ゴータマは仏陀となったのです。この王子が原型となって、つばめに命じて自分の身体金の板を貧しい人々に運ばせ続けた「幸せな王子」の物語が生まれたのではないかと推測されます。

お経というと難しい、と考えがちな私でしたが、悟りを開く契機が人々の心を打つ、平易な文

章で綴られているお経もあったことを知りました。まだまだ勉強は足りません、ということはいくらも気付かされるのが沢山ある、ということになります。また人・民族・国・宗教が攻撃しあう現在、この摩訶薩埵王子の「不惜身命」の心が見直されなくてはならないと思います。

茶道コーナー

去年は父の三回忌を執り行いました。茶道も父を偲んで追悼茶事を行いました。茶事というのは茶道にとって最高のもてなしとなる形式です。まず、茶庭から路地を通して茶室に入ってもらい、亭主が丹精した庭と、客をお迎えする思いを表す掛け軸を味わってもらいます。次に炉に炭を入れ、お湯を沸かし部屋を暖め、懐石料理を出します。料理を味わってもらいながらお客様が堪能するまでお酒を出します。最後にお菓子を出し、茶庭の腰掛に戻ってもらう間に茶席を改めます。ここまでが前半。再びお客様に席に入ってもらい、お濃茶と薄茶を味わってもらいます。約4時間のお客様とのやり取りが茶事ということになります。



この流れの中に様々な作法による客とのやり取りがあります。茶道というと堅苦しい作法でお茶を点てて飲む、というように考えられていますが、すべての稽古はこの茶事を行うために必要な点前や作法などを身につけるための稽古なのです。

今回の追悼茶事では父と関係の深い道具を取り揃えお弟子さんたちをお迎えしました。父は

総代であり陶芸家の篠田義一氏、表千家十三代家元即中斎宗匠、堀内家八代兼中斎宗匠のご指導・お力添えをいただき、茶の道を進ませていただきました。そこでこの皆様の茶道具と、父自ら書いた般若心経の掛け軸や手作りの茶道具を揃え茶席としました。この道具を取り揃えることにも茶道に関する多くの知識が必要とされます。私も必死で勉強しながら道具を取り揃えています、父一代でよくもここまで道具をそろえたものと驚かされます。茶道は季節の推移にしたがって点前が変わります。それに従い道具も変えなくてはなりません。1年間で10回ほど道具を入れ替えます。その道具がすべて揃っています。私が狭隘な知識で茶席を作れるのも、それを見越して道具を揃えてくれた父のお陰と、今更ながら父の偉大さに驚かされています。しかし仏教も茶道も私にとってはいつまでも続く勉強という道にしか見えません。諦めず一歩ずつ進むことにします。



葬儀や法事はお寺を式場にしてください

このように皆様にお声掛けさせていただくようになって、5年ほどになります。皆様

のお陰で本堂でのイスが揃い、お手伝いを担当する「りらの会」が発足し、お寺での法要をお任せする業者も揃いました。お蔭様で8年ほど前寺を会場にしての葬儀は全くなりましたが、去年は三分の一の数まで戻ってきました。

民間業者の会館を使った葬儀は駐車場が広く、設備も新しく、スタッフも揃っていますから大変便利です。しかし便利であるということはそれなりに費用がかかります。以前「葬儀社に支払う費用がかさみ、お寺へのお礼がこれしかできません。どうぞご勘弁ください。」と深く頭を下げられたことがありました。葬儀はあらかじめ計算して、というわけには行きませんし、急なことでパニックになっていますから、「あれもしなくては、これもしなくては」とつい予算をはるかに超えるものにしてしまいがちです。

ある業者の費用を計算してみました。病院からのご遺体の搬送から葬儀までの費用全部は、葬儀にお参りに来た人数に2万円をかけた金額がめどになりました。葬儀にお参りに来た人数が100人だとすると葬儀費用は100人×2万円、つまり約200万円。200人ですと約400万円を超える金額になります。

一方、お寺を会場にすると、一人当たり1万円弱になります。100人では100万円程。200人では200万円程となり、会館での葬儀とでは200万円以上の違いになります。(食事やお返しの内容で金額は多少変わります)

長々とお金のことばかり書きまして申し訳ありません。葬儀は最愛の人を送る儀式です。この宗教的の儀式を宗教の場、つまり寺で行わなければ宗教儀式の意味がなくなってしまいます。経済的な面ばかりでなく、宗教的な面も考慮していただき、ぜひ法要はお寺で行うようお考えいただきたいと思います。

住職の活動

なにやら深刻に話し込んでいる住職の顔が見えるかと思います。ここはSVA(シャンティー国際ボランティア会)ラオス事務所の会議室です。事実深刻な話をしています。そうです、「予算を削れ！」って話しているのです。

曹洞宗の取り組んできた海外への援助団体がSVAです。現在は外務省より認可された社団法人になり、日本の民間の援助団体としては三羽鳥の一つに上げられるようになりました。「しんす



けの行列のできる法律相談事務所」という番組で多くのタレントが自作の作品をオークションにかけ、その売り上げでカンボジアに学校を作る、という番組がありますが、実際学校を作っているのは私たちの団体です。支援の方針と技術の信頼度は最高ランクに評価されています。

しかし民間団体を取り巻く状況は最近富に悪くなっています。経済の悪化により個人の募金が減り、国や国連の補助金が削減され事業ができなくなり団体自体を解散するケースも増えています。SVAにとっても同じで、単年度決算では数年赤字が続きました。そこでこの会議になったのです。

また公益法人化の問題も出てきました。SVAのような社団法人格を

持ち、寄付や募金に対して税金がかからない認可を得た団体を、そのまま継続させるためには、公益社団法人という新たな法人格を取得しなければなりません。SVAは今年度中に必要書類を整えて申請するところまで準備を進めてきました。現在法人格を有し公益法人移行を検討している団体が2万5千あるといわれていますが、現在までに申請した団体はまだ330団体だそうです。定款をすべて書き換えますので、団体の名称、目的、事業内容、役員、会員、会費、議決方法、会長や監査や理事などの役員組織などすべてを検討しなおすため、SVAも一進一退を繰り返しています。法人化の高いハードル、NGOの運営など苦難の道が続いています。

そんな状況の中私もSVAの海外担当の常任理事を引き受けていますので、海外事務所での予算会



議に参加します。現地の職員のやる気を削がないよう、仕事の効率を上げ、節約し、少ない予算で最大の仕事ができ、新たな事業を創造してゆく喜びに気付いてもらえるよう説明を繰り返します。時としてけんか沙汰になりますが、気長に理解を取り付けてゆくのです。SVAの理念は「共に学び、共に生きる」です。日本人と現地の人がお互いに学びあいながら、現地の人々の文化や伝統に根付いた能力を最大限に引き出すことができれば、自然に援助事業は動き出し、援助する側とされる側の垣根を越えた「共に生きる世界」を想像してゆくことができます。この理念を理解している現地のスタッフは心からSVAを愛してくれており、給料の良いほかの団体に引き抜かれることもなく、すばらしい働きをしてくれます。現地での予算会議に参加し、すばらしい現地スタッフと共に仕事をすることを、私も誇りに思っています。

この会議の合間に首都ビエンチャンを案内してもらいました。ラオスは世界の最貧国の一つといわれていますが、社会主義の国で、国民性もゆったりしており、誰に対しても誠実に対応してくれます。誰もが一度行くとすぐ好きになってしまう雰囲気を持った国です。高さ45メートルの黄金の塔はタート・ルアンと言い、お釈迦さまの骨「仏舎利」が収められています。16世紀当時の王様の命により建設が始まり、1930年代からの修復で現在の姿になっています。

ラオスは仏教の国でルアンパバーン市には多くの仏教寺院が保存されており、世界遺産に指定されています。今回



ルアンパバーンまで行くことはできませんでしたが、ビエンチャンで一番古い寺をお参りできました。ワット・シーサケートは16世紀に王様の命で建立されました。現在でも約2000体の仏像が並び、人々の信仰を集めています。案内してくれたミーチェンさんも仏教の教えを知りたくて独学で勉強しているとのことでした。日本の仏教との違いにも興味があり、彼らの戒律は約300、曹洞宗は16と聞くとビックリしていました。いつかは出家したいとも話してくれました。

会議の最後の日はいつもおおり食事会。ラオスの酒は「ラオラオ」、アルコール40度。気を抜くと大変なことになります。ラオスの食事はタイとまた違っておいしかったですよ！

大黒コーナー

大黒の地道で派手な声楽家の活動も、昨年度は大きな分岐点に差し掛かったと思います。倉科京子ソプラノリサイタル「音の宴」というタイトルで初めてのリサイタルを開催しました。主催は“倉科京子「音の宴」実行委員会”。ファンや支援者が集まり、実行委員会という組織を立ち上げることができるようになりました。

皆様にご協力いただきましたリサイタル「音の宴」は10月31日（土）、まつもと市民芸術館主ホールにて開催されました。800人という多くの皆様楽しんでいただくことができました。松本はこの種のコンサートはチケットが売れない場所として有名です。そんななかで多くの皆さんが聞きに来てくださったのは協力いただいた皆様のお陰と、感謝に耐えません。



乾杯を合唱の皆さんと

第一部は歌劇「椿姫」のハイライト。ピアノトリオ（ピアノ・バイオリン・チェロの三重奏）で始まり、有名な「乾杯」へと続きます。ここで皆が高く杯を上げての合唱も入ります。オペラの数々ある曲の中でソプラノの最高音を要求される曲が続きます。裏話ですが、声が疲れる前にこの曲を歌ってしまわないと、ということで第一部にした、とも言っていました。二重唱は藤森秀則先生に出演をお願いしました。大黒がオペラを始めたモーツァルトの「魔笛」からずーっと共演し、気心のわかる、諏訪清陵高校の音楽の先生です。

第二部は「日本の心の歌」と題して日本歌曲や唱歌を歌い上げました。「荒城の月」など良く知られた唱歌や、「からたちの花」「宵待草」など技術的に難しい歌などを取り混ぜました。合唱団の皆様にも「落葉松」で



落葉松を合唱のみなさんと

賛助出演していただき、「早春賦」を会場の皆様と共に合唱しました。

第三部はオペレッタ・オペラのアリア特集。「セビリアの理髪師」や「メリー・ウイドウ」の有名なアリアを歌い上げました。何度ものアンコールの中で終焉を迎えました。

思えばリサイタルの準備を始めてからこの日を迎えるまでに、選曲、音響、照明など数々の難関にぶつかり、共演者や音響などの業者の方、師事の先生方のアドバイスにより豊かな内容のリ



藤森先生との二重唱

初めてのリサイタルでしたが、ただ一人で歌うだけではなく、今までに共演させていただいた演奏家や、合唱の皆さんの力を結集させたものにしたい、という今回のコンセプトでした。伴奏はピアノの坂内美季、宮下夏江、ヴァイオリンの近藤聡、チェロの嘉納雅彦さんの共演をいただきました。また合唱は、ゆうすげ、歌を歌う会、オペラを楽しむ会が参加して盛り上げていただきました。



サイタルになりました。会場の皆様にも純粋に楽しんでいただけるための気配りと工夫をしたり、ここまでの大曲を数多く歌い上げるということは、著名なソリスト達にもなかなかできないことと師事の先生にも言われたそうですが、歌い通した本人の努力と才能にも拍手をお送ります。

繰り返しますが、多くの皆様に伴奏や出演にご協力いただき開演にこぎつけることができました。至らぬ点多々あったかとは存じませんが、ご寛容のほどお願いいたします。ここに当日の写真を掲載し、皆様に感謝の意を表したいと思います。

掲示板 (皆様のご参加お待ちしております)

・・・ 檀信徒護持会新年総会 ・・・

1月23日(土) 4時より全久院で開催します。全久院の催しに参加していただいている方々など、より多くの方に参加していただきたく企画しています。3時より茶室にて薄茶を差し上げます。檀家の皆様にも堅苦しくなくお茶の雰囲気に触れていただこう思います。4時より本堂にてお参り、その後座禅会の皆様と5分間座禅、4時15分より護持会総会、4時半より懇親会となります。懇親会ではご詠歌の皆さんと観音講の方によるご詠歌の奉詠を2曲お願いします。



また南こうせつさん作詞作曲の「まごころに生きる」を皆さんで合唱します。次に観音講の皆さんで歌っている唱歌を2曲、みなさんにも歌詞を配り合唱していただこうと思います。他にも楽しく心豊かになる企画がありましたらぜひお聞かせください。皆様の参加お待ちしております。参加希望の方は1月20日(水)までに電話でご連絡ください。

・・・ 座禅会 ・・・

2月20日(土) 青山俊董師講演会・3月20日(土)・4月24日(土)・5月15日(土)・6月19日(土)・7月10日(土)・9月18日(土)お粥と精進料理・以上が上半期の日程です。毎回夕方4時集合4時40分まで青山俊董師の市民タイムスのコラム「従容録」を住職が解説し、5時45分頃まで座禅、6時まで茶話会という予定で行います。9月18日はお粥と精進料理を経験していただきます。座禅を経験していただきながら、ものの見方や生き方を豊かにし、生き

てゆく上での支えが見つかると思います。

・ ・ ・ 青山俊董師特別講演会 ・ ・ ・

2月20日(土) 3時から
6時まで 参加費500円

座禅会主催により、座禅会で読んで
いる「従容録」をもとにお話し
をいただきます。お話しを聞きた
いという方は檀家以外の方でもご
自由に参加できますので、お誘い
あわせておいでください。



・ ・ ・ ご詠歌会 ・ ・ ・

3月11日(木)・4月15日(木)2時より・5月6日(木)・6月10日(木)・7月8日(木)・
9月9日(木)・

午前10時より11時半まで、白板 東昌寺副住職 飯島恵道師にご指導いただきます。全久院
のお盆法要、新年会、和合会の花祭りなどにも参加します。一緒にいかがですか。

・ ・ ・ 観音講 ・ ・ ・

毎月17日10時から12時半まで行います。10時から観音様にお勤め、10時20分からご
詠歌、10時50分から大黒の指導で唱歌の合唱、11時20分より大黒手作りの野菜中心の食
事という日程です。現在15人ほどの参加者があります。気寄りが良く60代から90代の方が
元気に集まって来ます。気楽な会ですのでぜひご参加ください。